

鸚鵡の言乃葉

増野虎発記

整理番号 4  
1 3 袋

1 天明八戊申の孟夏 これを写す

4 3 2 天明元年秋八月二十一日 白川世子源 定信(松平定信)著

24 鸚鵡の言乃葉

天職のこと

天よく民を治むる事あたわざる故に、大君(おおきみ)を立て治めしむ、大君独り治むる事あたわず、諸侯をたてて治めしむ、諸侯の民を治むるは、大君の命にして天命なり、故に治むる職は天の職にして、治る民は天の民なり、其の器其の徳、天職に堪ゆるにあらざれば、かたしと言ふべし、さ(然)るに、私智を用いて天民を虐げ、天職を空しくせば、天その人を廢して又ことひとにあたえ給うなり、其の故に天職を初めて受くる人は、必ず徳器備わる所の人なり、其の子孫に至りては、たとえ昏愚にてもあれ、祖先の法に

25 さえたゆれば、天その祖先の徳によつて其の人を廢したまわざるなり、これ天の寛仁を躰し給う、天器の御徳にして、且つは祖先の余光とやいわまし、昏愚の器にしては、祖先の余光を以て万人の上に居て、位禄全く受けし身こそ、天へ対しても恐るべきなり

徳をつつしむこと

徳は直心を行うと言え儀にやあらん、直心は天理なり、請け得し天理

に立ち帰るを徳とは言わなん、徳をつつしむとは立ち帰りし後、尤もゆるさず、日新の功を積むことなるべし、上の徳、明らかければ治国平天下は、期せずして自らしからんかし、其の徳、いかにしてか明らかにするべきとならば、聖賢の書を読み、それを身に立ち帰るにてぞ有るべき、只詩文にはせて実用をつとめず、高遠に求めて至(近)をしらざるは、かの腐儒の論にして言つに足らざるべし、其の徳の全(き)に至りなば、臣民の服従すること衆星の北辰に向かい、草の風に吹きなびくがごとくなるべし、財なく用なきの患(うれ)い、いかにしてかあるべき

学問のこと

読むべき書は、わきて四書五經の類、大学衍義、又は日本記・史記通鑑をもあわせ読むべし、熊沢(蕃山)の集義外書・大学或問、新介が雑話の類また読むべし、御自家のこと

26 書きたる書、またよく読むべし、読むべからざる書はなし、ただ其の要をいえるなり

下情のこと

天地は則ち君臣の位にして、天氣地を潤し、地氣天をたすくとやらんにて、君臣交泰(更恭)してこそ国家も安く治るべし、地をはなれては草木も生ぜず、天をおほはでは草木も育たざるがごとし、君臣否塞しては国家の安く治る期はあり難かるべし、されども君は上にありて貴(尊)きこと天の如く、臣は下にありて賤(し)きこと地のごとし、故におのずから隔絶して上下の情を通ぜざるに似たる(至)なり、今世は下のことなど言ふは賤(し)きことと言つて、上徳を汚すとして禁ずる、こは歎(な)かしけれ、下情とは下の人の情なれども、人情に上と下とのたがい(違)なければ、夏の水を求め、冬の火を求むる心よりして、安きを思い逸を甘んずることなるは通情なり、下を見ること己(わ)が如くにあらば、などて下情の知られざるべき、赤子のもの言わざる、情をだに知るは父母の誠なり、下を思う心、誠ならねばこそ下の情には疎(と)けれ、人を我(ご)とく思(う)なるは、心の修行によれることならんかし、上中下の字を釈したることく、上の字をくつがえせば下の字となり、又下の字をかえせば上の字になるなり、上下の中に居て、其の情を通ずるを以て、中の字は

27 口を上下に貫くとこそ有りがたけれ

君臣のこと

撥乱の君は臨乱の君の臣なり、我は君なり、飽食暖衣すと言つべけれど

も、その食その衣は誰が作りなす所にやあらん、その作りなす人なくば如何せん、君自ら織つて衣耕して食うべし、我は君なりと言うは、理しらぬとやいわまし、君臣もと「は」同じく人なり、只我祖先の貴きと、賤しきことよつてこそ君となり臣とはなりつれ、いつか梢の花散りて土芥に交わることを知らん

#### 賢才のこと

賢をあげ不賢を遠ざくるは、聖賢委しく教えをたれ給えば、又何をかいわん、濟々たる多士、文王やすし(詩経・大雅)と言いたれば、いかで賢才ならで国を治め得ん、唯よきと言う人は、如何あらんと察すべし、我が心に叶いたる人は、いかがあらんと察すべし、人心面の如く(左伝)となれば、君臣合躰というはその道の合を言えるにて、君の可否善悪に、我が臣の心と府合するを言うにあらず、かの晏子の言える和と同のごとし、辛甘味を異にするを以て、よく味わいをととのつ、是を和というこそ、甘を以て甘を和し、辛を以て辛を和すは和にあらず、同というごぞ、同ずる人は奸佞か、また愚なる人が、よき人と

28

知らば用いよ、猶予する内に (必ず)その人も悪しく見ゆるものにて、いつかいつかと待ち期し、花のつぼみ開きは、色つすく見ゆる類としていまわし、さて人に任ずるは、鄙吝の心なく任せて、欺かるべし、欺かれし時は其の人の稍朽ちぬべし

#### 政のこと

政とは正文と書くなり、正は天理自然の道にして、則ち質とて下地なり、それに文を加えて見事になすを以て政と言ふるなるべし、其の政をほどこすに、寛猛の時に応ずるようになりたき事なり、寛猛勢いを異にするども、同じく聖人世を慮むの仁より出るなり、されば、秋の肅殺も仁の肅殺にして、春を得て発生しやまざるゆえんと言ふるに等し、その政に時と勢いと位とをはかるを要とす、此の三つをいわば、いかのほり(紙鸞、風)上ぐるを以てたとえなん、江都にては春を時とし、その国々にて又その時にて違つたり、其の時を得しとて其の風を得ざればあたわず、江都にて春を得しは時なり、風を得しは勢いなり、其の風の吹くを待つてあぐるは、其の勢いを得るとやせん、時と勢いを得ても、木立しげりし地にては又あたわず、我が身高き所にとまりて、四方の梢を見下ろして風を得て放せば九天へも通ずべし、其の時と勢いと

29

位とを得ても、その人を得ても其の風について紙鸞の重き軽きをはか

り、とやかくするは術ともいうべき、其の術さままなれど、紙鸞を上ぐる外ならぬ、治国の術はもとあるを知るべし、なんぞ徹せざるにしろしたる、先納のことはよかるべからんか、其の国その世その人によるべければ、刻舟してはいい難かるべし、位をとる術もよからんか、商鞅が木を移す(史記、商君列伝)類にて、又其の味わいあるべき事なり、術といえども奇正の計策をなす如くに思いて、才の足れる者は術を先にし、才の足らざる者は、術計はわが及ばざる所なれば、とにかく治国の功はなし難しとは言ふなり、術といひ才と言ふも、本は徳にして、本なき才と術とは庭潦(ていろう)のたのむべからざるが如し、昏愚の下民を救わんととも、人毎に説き、戸毎に悟るべき物にもあらざれば、かりに術をもうけて、知らずしらずして、其の道によらしむるなり

#### 賞罰のこと

賞といひ賞という、玉帛をいわんや、刑といひ刑という、刀鋸をいわんや、よく与つるの、取りたることをしるぞよき、取るがために与つるぞわるき、賞刑は春と秋との如くにして、只仁の外ならず、よく私をさりて思い計るべし

#### 生財のこと

30

入るを量りて出す事をなすは経済の本なり、儉約は費を省きて、つつまやかにする事なるべし、惜しむにあらず、入りは陰にして出るは陽なり、陰陽は天の道なり、入りは吸にして出るは吐なり、故を吐き新を吸うは人の道なり、入りは蔵へ財を貯るなり、出るは其の財を以て用をなすなり、引息のみにて出る息なければ、息つまりて胸苦しくて大息すべし、入るのみにて出ることなければ、終に不時の禍を得て、貨も取り出るの患(禍)あり、呼吸を平にするは、養生の道にして、出入りの平にするは生財の道なり、是れ又下情を知らざれば、我こそよけれと思えども、わが思うごとく下へは達せざるなり、賢才を選びて情を通じ侍るべし、賢を知るは又人君の正心修身に奢りの風儀に流れ移り侍らん

#### 名器のこと

名と器とは人にかさずとて、賢き人も重んじたり、名の名たるを知るは、道を知らざれば難かるべし、年の暮れの鶯の声は必ず忙しく、元日の朝の馬の声はのどやかに聞くぞ、名の名かるべきを知らせたり

#### 利と義のこと

利は秋にして、木をかるを以て言ふるなるべし、利は聖人の

罕に言い給う(まれ、論語、生まれに利をいう)所にて、大学の終わり「仁」  
義理を弁じ、孟子の始めに義理を弁ぜり、利不利たりも知り、不利の利  
たるも知るは難し

その外、書きしるしたきこともあれども、事長きは略しぬ、知るは  
難からず、行うことは難し、小子の言の葉、人の口まねびなり、ゆ  
めゆめ行い得たる事はなし、御同意の御かたがたと切磋琢磨して、  
仁をたすくべきごとく存知候ばかりに御座候